

## 編集委員会からの謝辞に代えて

本書は1990年に「日本英語英文学会」(の前身「八王子英文学研究会」)が設立されてより四半世紀の年月を重ねた佳節を祝う書である。本書が完成に漕ぎ着けるまでに多くの方々のお世話になった。編集委員会を代表し、その方々に一言、御礼申し上げたい。

私と本会との出会いは、青山学院大学大学院の博士後期課程を2002年に修了して、母校の非常勤となった折、同じく新任の非常勤として当時の厚木キャンパスで一緒にすることとなった永谷万里雄先生(現顧問)とのお付き合いに遡る。その後、私も友人の勝山裕之氏(現評議員)も、永谷先生からの「一度、ぜひ日本英語英文学会に顔を出して頂けませんでしょうか」という度重なるお誘いに逆らえず、確か、第15回年次大会(2005年、於：亜細亜大学)に足を運んだところ、その夜、懇親会どころか会そのものに引き込まれてしまった。渋谷和郎現会長が当時はケンブリッジ大学大学院生として発表されていたことや、木内修先生(元副会長・元編集委員長)が懇親会の酒席で年会費の徴収や領収書発行作業にあたられ、私も領収書を発行して頂いたことなどが思い出される。しかし、まさかその自分が後年、編集委員長や副会長の職責を果たすことになるとは想像だにできなかった。なお、その後も、永谷先生の持つ、ベテランであるにもかかわらずいつも腰の低い笑顔と、しかし不思議な強引さの故、私がDTP出版で大学英語教科書を編集することとなったことは学会の大方をご存知のことと思うが、永谷先生と知己を有する方は多かれ少なかれ同様の経験をされていることと思う。

私が入会した折、本会は東洋大学や亜細亜大学出身の先生方が中心の学会かと勝手に想像していたが、現在は北は北海道から南は九州に至る、各地の大学の方々が属されている学会となった。それまでの歩みを支えて来られた20周年記念号の編者たる藤田崇夫先生(前会長)、鈴木繁幸先生(初代会長)、松倉信幸先生(八王子英文学研究会初代代表)のご努力に感謝の意を表したい。その後、本書の編者三人が執行部を引き継いだ訳だが、何事の運営も会長の渋谷和郎先生、事務局長の土居峻先生との協力なしには

進められてはいない。その他、巻末に記す顧問、理事、評議員を含めた全役員の先生方の日頃のご協力に記して感謝申し上げる。

さて今回、10周年記念刊行物『英米の言語と文学』、20周年記念刊行物『英語と英語教育の眺望』を含めた学会誌25号全ての中で、英語学、英米文学、英語教育学のいずれの分野においても最も投稿数が多かった。これら力強いご論考をお寄せ頂いた会員諸氏に感謝すべきであろう。しかし、この投稿数のため、査読作業、編集作業はこれまでになく困難を極めた。伊藤達也、菅野悟、女鹿喜治の三副委員長の日頃のご協力も含め、今回、複数の査読を担当し、丁寧な査読に努めて頂いた11人の編集委員の労を多としたい。また、その投稿数の多さと専門性を勘案し、これまでで一番多くの外部査読もお願いした。以下の方々に心からの謝意を表する次第である(五十音順、所属は2015年10月現在、敬称略)。

茨木正志郎(北海道教育大学札幌校)、江頭浩樹(大妻女子大学)、大森夕夏(東京電機大学)、奥井裕(和光大学非常勤)、加賀岳彦(日本女子体育大学)、笠原究(北海道教育大学旭川校)、田村裕二(早稲田大学非常勤)、外池滋生(前青山学院大学教授)、宮崎幸子(東京都市大学)

その的確かつ詳細な査読のため、再投稿論文を作成されるのに苦労されたり、残念ながら論文を取り下げられた方々もおられ、正直、編者として恐縮の念を有しているが、本会が全国学会の道を歩み始めている証左なのであろうとも同時に思う。しかし、学会誌でありながら、比較的自由的な発想、スタンスでの執筆が可能である本学会誌の良き伝統も引き継いでいくことも同時にまた重要であろうと思う。なぜならば、上述の歴代役員がしばしば言及されてきたように、本学会には自由的な発想で書かれた本学会誌の論文が評価されて大学専任教員の職を得られた方が複数おられる訳で、そのような場を提供することも本学会の役割の一つだと思われるからである。

末筆ながら、第16号以来、本学会誌の出版をお引き受け頂き、今回の記念号の出版もご快諾頂いたDTP出版代表の鳥居有一氏、及び、いつも丁寧な編集作業に携わって頂いている同編集部の木村勇太氏に記して感謝申し上げます。本書が本学会の次なる歩みへの第一歩とならんことを祈りつつ、編集委員会よりの挨拶に代えさせて頂きたい。

2015年10月吉日

編集委員長・副会長 野村忠央